

東分中村経塚

平成11年度

美祢市教育委員会

序

美祢市は、山口県西部の日本海と瀬戸内海とのほぼ中央の位置にあって、弥生時代から古墳時代の遺跡が多数あり、また、古代より陰陽連絡道の要地として早くから開けた歴史をもつ内陸の小都市です。

近年、地域開発に伴ってこれらの遺跡の発掘が行われていますが、私たち先祖の遺産である文化財を大切に保存し、また、記録して郷土の歴史解明の史料とし後世に残すことは、私たちの責務と感じます。

このたび、美祢市教育委員会が、美祢市東分中村丘陵の土地開発にさきがけ遺跡調査を実施し、積石遺構を確認したのでこの発掘調査を行いました。

調査の結果、全国的にも数少ない複合経塚であることが判明し、経塚研究にとって貴重な資料を得ることができました。また美祢市の平安時代末期から中世にかけての美祢市の歴史を知る上で貴重な史料と考えられます。

本書は、この調査の記録をまとめたものですが、一人でも多くの市民の方々に読まれ、歴史への关心の高まりと、文化財愛護思想の高揚、普及に役立てていただければ幸いと存じます。

なお、この調査に当たり美祢市文化財保護審議会委員河本芳久氏、土屋貞夫氏をはじめ、関係各位の絶大なるご尽力を賜りましたことに厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

美祢市教育委員会

教育長 朝 廣 廣 志

例　　言

- 1 本書は、平成10年7月30日から8月10日にかけて実施した東分中村経塚の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、山口県教育委員会文化財保護課の指導を受けて、美祢市教育委員会が行った。
- 3 本書の編集、執筆、製図等は河本芳久が行い、遺物の復元は山口県埋蔵文化財センターの協力を得た。

本文目次

1 遺跡の位置と環境	1
2 調査の経緯と概要	6
3 遺構と遺物	8
1) 遺構	8
2) 遺物	11
4 経塚に関する所見	14
1) 造営目的とその変遷	14
2) 美祢市の経塚	17
5 まとめ	19

図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2図 経塚主体部復元想定図	8
第3図 経塚実測図	9
第4図 出土遺物実測図	12

図版目次

図版1 出土遺物	20
図版2 東分中村経塚遠景	21
図版3 積石遺構の状況	21
図版4 遺物出土状況	23
図版5 経塚の石室	24
図版6 南原寺経塚	26
図版7 高下観音堂経塚	27
図版8 西円寺経塚	27
図版9 万倉地経塚	27

1 遺跡の位置と環境

1) 地理的環境

本遺跡は美祢市大嶺町大字東分字中村に所在し、広くは東分中村遺跡の区域に含まれるが、時代的にはこの遺跡とは直接関係がなく、立地している場所とまた経塚であることを考慮し遺跡名を東分中村経塚とした。

東分中村遺跡は、弥生時代前期末から古墳時代にかけての集落跡であるが、本経塚は複合経塚である。造営の初期は平安時代末期を中心にその前後で、追納の終わる時期は鎌倉時代末期が想定される。

東分中村経塚は、大嶺盆地の南西部吉則に位置する美祢駅北西に広がる標高約120m余りの丘陵性山地が大嶺盆地に迫る山丘の尾根の先端に構築されている。この地から北や東に向かって大嶺盆地が一望でき、南東には南原寺経塚のある桜山が遠望できる好位置にある。

山地は盆地水田面から約30mの比高差があり、この尾根が字中村と字二ツ堂の境界となっている。またこの位置には、中国電力大嶺変電所に通じる高压線の鉄塔が2基建っており、その一基が本遺跡のそばにある。山地は杉やカシなどの樹木に覆われており、東側山腹には中村集落の天神様の社が建立されている。山麓に向かっては東、西側共に急斜面となっており北側山麓には、中村洪積台地が広がりここに東分中村遺跡が立地している。



上空からみた大嶺盆地と遺跡

大嶺町東分地域は大嶺盆地にあり、この盆地は美祢市の中央部にあって秋吉台石灰岩の西部に位置し、東西1km、南北3.2kmの広がりをもつカルスト地形特有のポリエである。東には標高300~400mの於福台や伊佐台の石灰岩台地が南北に横たわり、長門市との境の山地に源を発する厚狭川が南流し、ポリエ南端の吉則で伊佐ポリエを西流してきた伊佐川と合流してやや広い平野をなしている。南部は桜山山地が東西に連なり、山麓は厚狭川を隔てて伊佐地区となっている。この地域は交通機関もよく発達しており、南北に美祢線や国道316号線が通っている。大正5年山陽と山陰を結ぶ美祢線開通により吉則駅（現美祢駅）が設置され、これにともなってこの地区的町並みも形成され、さらに昭和29年3月市政施行で市役所や公共施設が建設され、美祢市の中心地として発展してきた。一方遺跡の立地している盆地周縁の台地や丘陵は、宅地化が進んでおり、特に東分中村経塚の立地している中村丘陵から北西部の山地は、工業団地や住宅団地として大規模な開発がなされている。

2) 歴史的環境

美祢市内の遺跡は、ほとんどが厚狭川及び伊佐川沿岸の洪積台地上に展開しており、特に大嶺盆地周縁に多くの遺跡が分布している。ここでは、大嶺盆地を中心とした弥生時代から中世にかけての主な遺跡の概略を述べることにする。

弥生時代の遺跡は、厚狭川上流の於福盆地や大嶺盆地、伊佐盆地などのカルスト盆地周縁の丘陵や洪積台地上に多く立地している。

於福地区には、宮の前遺跡や上ノ山遺跡がある。厚狭川の上流に開けた沖積低地で緩やかな丘陵上に立地している上ノ山遺跡は、発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡（26軒）や竈跡（10基）、泥岩制石鎌、細形銅劍、管玉、石斧などが発見されている。宮の前遺跡は、まだ発掘調査されていないが水田の土地基盤整備中に住居跡や弥生式土器（中期から後期）、須恵器、土師器などの遺物が多数検出されている。また遺物散布地や遺物包含層も広い範囲にわたって丘陵段丘面に分布している。

大嶺地区には、東分中村遺跡や上領遺跡、曾根遺跡、向原遺跡、彦山遺跡がある。東分中村遺跡は、美祢駅北西にある中村洪積台地上に立地している。台上には美祢中央高等学校や市営住宅が建っており、昭和40年代から宅地化が進み畠地は非常に少なくなっている。昭和42年高等学校のグランド拡張工事中多数の土壌や住居跡が発見され、発掘調査の結果弥生時代前期から後期にかけての住居跡であることが判明した。美祢市内では最も大きな集落跡であり、木葉文や羽状文、鋸歯文などの文様を施した前期弥生式土器を出土した遺跡として注目されている。石斧や石鎌、磨穀石、砥石なども検出されている。弥生中期の集落跡である彦山遺跡は、カルスト台地伊佐台の西端で大嶺盆地に突き出た標高136.2m、比高46m余りのカルスト台地上の西端に立地している。このカルスト台地を彦山と称しており、古くは修験者をとおして九州の英彦山とのつながりが伝承されている。遺跡の立地



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

大嶺・伊佐盆地遺跡一覧表

平成11年3月河本芳久調査

番号	遺跡名	所 在 地	立 地	遺 用
1	東分中村経塚	大嶺町東分中村	丘頂、山林	複合経塚、経筒、青磁
2	東分中村古墳	大嶺町東分中村	丘頂、山林	墳丘、封土確認
3	東分中村遺跡	大嶺町東分中村	洪積台地、校地 宅地、畑地	弥生時代、古墳時代住居跡、 多数の堅穴、船形磨石、管玉
4	下領遺跡A地区	大嶺町東分下領	宅地、墓地、畑地 山林、丘陵	弥生式土器、須恵器、和鏡出土 土器容器散布地
5	下領遺跡B地区	大嶺町東分下領	宅地、畑地、水田	屋内住居跡露出、石斧
6	上領遺跡	大嶺町東分上領	洪積台地、水田	住居跡、土製勾玉、 弥生式土器、須恵器
7	曾根遺跡	大嶺町東分曾根	沖積地、洪積台地 水田、畑地	住居跡、土師器、石斧、 土師器、須恵器
8	向原遺跡	大嶺町東分向原	洪積台地、山麓 校地、宅地、畑地	弥生式土器
9	彦山遺跡	大嶺町東分彦山	カルスト台地 山林、旧畑地	弥生時代高地性集落、 石斧、弥生式土器
10	コジキ穴遺跡	大嶺町東分彦山	カルスト台地山麓 洞穴	縄文式土器、弥生式土器、 貝輪、骨製品 道路建設で発見
11	彦山古墳	大嶺町東分彦山	カルスト台地 山林	円墳4基余り
12	横道古墳	大嶺町東分横道	カルスト台地 山林	横穴式古墳2基他に数基 破壊跡あり
13	伊佐古遺跡	伊佐町伊佐	カルスト台地 越山	石斧、人骨、ホンマグロの骨
14	丸山遺跡	伊佐町丸山	洪積台地、沖積地、 畠地、水田	石棺、石斧、弥生式土器、須恵器
15	広下遺跡	伊佐町広下	沖積地、山麓 水田、畑地	土壌、遺物包含層、土師器、須恵器
16	広下古墳	伊佐町広下	山地中腹 山林	円墳一基天井部破壊
17	内川古墳	伊佐町内川	丘陵、山林	箱式石棺2基市立図書館へ移築 美称インター工事発見
18	内川遺跡	伊佐町内川	沖積地 水田	須恵器、土師器包含地 用水路工事で土器類多数出土
19	野崎遺跡	伊佐町野崎	洪積台地、畑地、水田	住居跡、石器、須恵器
20	万倉地遺跡	伊佐町万倉地	洪積台地、丘陵、 畑地、山林	土師器散布地 中世鉢跡、崖面堅穴露出 弥生式土器、須恵器、陶器
21	万倉地経塚	伊佐町万倉地	沖積地、水田	回回納経塚
22	城跡	伊佐町城山	山頂、山林	中世地頭伊佐氏の城跡
23	南原寺経塚	伊佐町南原寺	山頂、山林	経塚群、滑石製経筒
24	南原寺遺跡	伊佐町南原寺	山腹、山林	中世墳墓、寺院跡
25	牛明遺跡	伊佐町牛明	洪積台地畑、墓地 沖積低地、水田	石斧、石錐、土師器 須恵器散布地
26	高下觀音堂経塚	伊佐町牛明	洪積台地 觀音堂内	法華經写経塚2基 移築されたものと推定
27	小林古墳	伊佐町小林	山麓、畑地	円墳一基、墳丘確認
28	下村遺跡	伊佐町下村上	山麓台地、畑地 河岸段丘、水田	石斧、石錐、住居跡 弥生式土器、須恵器
29	東治倉遺跡	大嶺町東分治倉	台地、畑地、住宅	石斧、土師器、住居跡
30	二ツ堂経塚	大嶺町東分二ツ堂	洪積台地、住宅	有銘中世経塚、破壊
31	吉則古墳	大嶺町東分吉則	洪積台地、森	古墳一基、則石露出
32	平城遺跡	大嶺町東分吉則	沖積地、台地、 水田、畑地	中世集落跡、中世墓 土師器、青磁散布地

状況から、畑作ないしは防衛的機能を持った高地性集落と考えられている。この遺跡からは、多くの石斧や石材と共に半製品の石斧が検出されており、このことから石器製造跡の可能性も考えられる。中期末から後期の土器を含む包含層や磨製石斧が見つかっている下村遺跡が大嶺盆地の南端の台地上に立地している。このように厚狭川上流の大嶺盆地周辺に弥生時代の遺跡が多く分布しているのは、ポリエの湧水と深く関係があるものと考える。

古墳時代の住居跡は、多くは弥生時代の遺跡と重複しているが、上領遺跡や伊佐地区の内川遺跡、広下遺跡のように沖積低地に立地しているものもある。大嶺地区の中村や下領、向原、国行、長ヶ坪の台地には土師器、須恵器を含む包含層や住居跡が確認されている。この時代を代表するものは古墳であり、於福地区で2基（宮の前古墳）、大嶺地区で9基（横道古墳、彦山古墳、吉則古墳、中村古墳）余り、伊佐地区では3基（内川古墳、広下古墳、小林古墳）発見されている。山口県の西部内陸部の美祢市地域では、大嶺盆地周縁に横穴式石室をもつ後期古墳が多く築造されている。

美東町では、長田の立石遺跡で4基の古墳が発見され発掘調査が行われている。

秋芳町には、前期に該当する箱式石棺群が岩永本郷地区で多く発見されている。また金鏡金の環頭太刀や水晶の切小玉、瑪瑙の勾玉、須恵器を出土した大里古墳についてはよく知られているところであり、美祢地域の有力者の古墳と考えられる。後期古墳の分布は、大嶺盆地に卓越しておりこのことから古代の美祢の中心は、大嶺盆地にあったものと推定されている。

次に歴史時代についてみると、宍戸国に「美祢郡」のあることが「和名抄」に記されている。美祢郡のうち美祢市に属するものは、美祢、位佐、意福、阿津の4郷であったと考えられている。また「延喜式」の諸国駅伝馬の項によると、山陽道と、山陰道を結ぶいわゆる陰陽連絡小路が山陽町の厚狭から大津郡の三隅に通じ、途中に阿津、鹿野、意福の駅家が美祢市内にもうけられている。阿津は厚保であり、意福は於福であるが、鹿野がどこであったか、今日この地名が残っていないので明らかにすることはできない。鹿野が阿津と意福の間に位置しているところから大嶺にあったことが想定される。「文徳実録」に仁寿元年（851）10月8日長門国四神が從五位下を授与されたと記されており、この一神に「鹿」の社があがっている。この社跡は下領台地にあり、下領八幡宮につながっていると「防長地名調鑑」で御園生翁甫氏が述べている。また美祢市史に「上領、下領を含む大嶺盆地は、周辺に古墳や古代遺跡が多く、曾根遺跡にも条理の遺構らしいものが見られることから、この付近に郡家の位置を設定したい。」と記しているが、これは妥当な考え方と思う。郡家の近くに駅家が置かれることが自然であり、鹿野の位置は下領から中村にかけての地区にあったものと推定される。

大嶺盆地の南に連なる標高445.5mの桜山の八合目あたりに長門の真言宗の古刹「南原寺」がある。寺院の裏山周辺には、坊の跡、中世墓、経塚、祭祀跡等の遺構が数多くあり、昭

和56年積石造構の発掘調査では、法珠形つまみを備えた滑石製經筒が出土している。この経塚が構築されている地区には、他にも類似な積石造構が3基あり、このことから経塚群が想定される。

平安時代末から中世にかけての大嶺盆地についてみると、天仁元年（1108）12月30日京都の石清水八幡宮の宿院極楽寺領として「長門国大嶺庄」が記録されている。また文治元年（1185）正月頼朝は大嶺庄が武家によって年貢が横領されているとの社家の訴えに対し、これをかたく禁止することを伝えている。建武中興の直前、元弘3年（1333）南朝方の石見の高津道性が大軍を率いて長門探題北条時直軍と大嶺の地で戦ったことが「正慶乱離志」にみられ、大嶺の地頭由利氏は当初幕府軍の一翼として活躍しているが、この戦いの途中に矛を反し南朝方に加わっている。南北朝時代も終わりに近い永和元年（1375）頃には長門守護大内弘世の勢力がこの莊園に及んでいる。さらに文明間（1469～1487）の頃には大内の重臣杉美作守重道が大嶺を支配し、文明12年10月9日連歌師宗祇が博多から山口への帰り道、この館を訪ね3日間逗留している。10日の連歌会の宗祇の発句は「木がらしを菊にわする山路かな」であった。12日の早朝、山道を思いやる杉氏の用意した輿に乗って宗祇は大嶺を出発し大内館のある山口に帰着している。このことは「筑紫道記」に書き留めている。応仁の乱で西軍に味方した大内政弘は、大軍を率いて京都にのぼり約10年間滞在し、戦況に大きな影響力を及ぼした。この時、杉氏も重臣として参加しており、文明9年（1477）正月彼の陣所で宗祇を招き連歌会を開催している。これ以来の旧知と言うことで大嶺を訪ねたものと思われる。

中世における大嶺の領主由利氏や杉氏が、どこに館を築城していたか不明であるが、大嶺町東分には土居ノ前、上領、下領、平城などの地名が残り、中村と二ツ堂境付近に宝鏡印塔や五輪塔が建立されていることからこれらの地と何らかかかわりがあるものと考えられる。

以上、概略ではあるが大嶺盆地の歴史的流れを記述した。この歴史が美祢市の歴史の中核をなすものであり、この中心の地が盆地西側に広がる舌状台地の上領、下領、この南につながる中村、二ツ堂である。今回の調査によって美祢市の歴史に新資料が提供できることは意義深い。

2 調査の経緯と概要

大嶺盆地周辺の台地や丘陵には、先に述べたように多くの遺跡が分布している。なかでも美祢駅北西から南西に至る下領台地や中村台地、さらには本遺跡の立地している山地山麓の中村下から二ツ堂地区にかけては、弥生時代、古墳時代の遺跡が多い。今日まだ場所

は断定されていないが、中世の豪族由利氏や杉氏の館跡、城跡についてもこれらの地区にあったことは確かであり、今後の調査に期待されるところである。これらの地域は、近年宅地化が進み大きく変貌しつつある。なかでも中村台地とその背後の中村丘陵の山地は、工業団地や大規模住宅団地として開発が行われてきた。このため、今後開発に伴ってこの地域の埋蔵文化財調査が必要である。

中村台地に隣接する山地は、池尻住宅団地、市立病院として開発され多くの住宅が建ち並んでいる。かって東分中村遺跡とのかかわりでこの地区を河本芳久が昭和40年代に踏査を数回実施した。当時は山林に覆われていたので十分な調査ができなかった。

本遺跡の立地している池尻団地東側山地は、防災と環境保護のため開発されずに保全されていた。ところが宅地開発業者がこの地区を開発する予定であったので、土地造成に先立ち文化財調査を実施することとなった。今回はすでに山林が伐採され踏査が容易な状況にあった。美祢市教育委員会の要請により河本芳久が調査を行ったところ、積石造構一基と直径約16mの墳丘造構を確認した。山口県教育委員会文化財保護課の指導を受け、積石造構の発掘調査を河本芳久、土屋貞夫が平成10年7月30日から8月10日にかけて実施した。一方、古墳と推定される場所については、山口県教育委員会と美祢市教育委員会が墳丘の測量と南北にそってトレンチを入れ、試掘調査を行った。この結果、墳丘の中央部に盗掘の跡があり、また、墳丘には盛り上の痕跡が明瞭に確認されたが、古墳の内部主体にかかる造構や遺物等は現段階では検出されなかった。

本造構は古墳である可能性が高いので今後の土地開発とのかかわりで発掘調査を検討しなければならない。

今回発掘した造構は、底部が直径約3mの円形形状を呈し、大小入り交じった自然石を2~3段積み重ねた小丘状の積石造構であった。一見、積石の塚といった感じの造構で、地元の人たちは、この造構を墓地と受けとめていた。昔から供養のためお花を供えていたと語っており、その痕跡として花瓶に使用したと考えられる多数のビン類の容器が積石造構中央部から検出された。本造構について当初は、古墳又は経塚を想定して発掘にあたったが、積石を2~3個取り除いたところ図版4-2のとおり陶製の壺（第4図-1）が最初に検出された。この遺物が経筒であることが判明したので経塚であることを確認した。

経塚の特色は、經筒を「埋める」というところにあるため、どのような場所に、どのような状態で埋経されたのか、このことを経塚構築の過程や内部造構の状態を通して明らかにしたいと考えた。

調査は石組みを実測しながら、最初に北東4分の1の積石を上段から除去していった。

造構中央部の上段の積み石を3個除去したところ、図版1-1の陶製經筒が最初に姿を現した。この經筒は、積石造構の内部に石室状に近い石組みが施された内部から出土した。この石室には、經筒を置く台石が設置されていた。それは長軸42cm、短軸29cmを測り不

整形な長四角状の大理石の自然石が用いられていた。陶製経筒は図版4-2のとおりこの破損した破片の一部を蓋代わりにした状態で検出された。さらにこの経筒の下部から四耳壺（図版1-2）が検出されたので、上段と下段に石室を設けた内部構造をもつ経塚であると推定した。上部石室状の内部には、陶製経筒のみで、他に副納品類はなかった。また経筒の中には、土が詰まっており、經典にかかわる遺物類は何も検出することができなかつた。陶製経筒の蓋に同じ経筒の陶器片が使われていること、また置かれている位置が、台石の上ではなく側壁にあったことから盗掘にあつて可能性が高いと判断した。盗掘のことは、その後地元の老人クラブ会長で郷土史家の中島直人氏の著書「ふるさと」（昭和50年発刊）で明らかになった。すなわち、この書には、「かねてより天神様の社のすぐ上のところに、古墳に似た石の小山があり、これについていろいろな風説がなされていたが、昔、あるときこれを神社下の住人が掘り起こしたという伝説が伝わっている」と記している。このことから、この経塚は盗掘にあつていることが明らかであり、盗掘によって他の経筒や副納品類は持ち去られたものと考えられる。

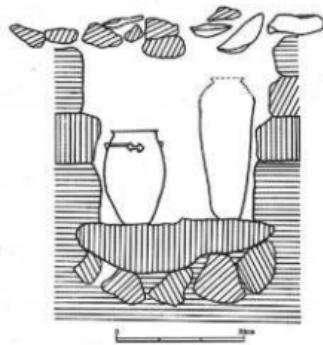
調査は、下部石室の遺構状態を調査しながら発掘を行い、最後には、積石を全部取り除き、遺構の構築過程を明らかにするように努めた。

3 遺構と遺物

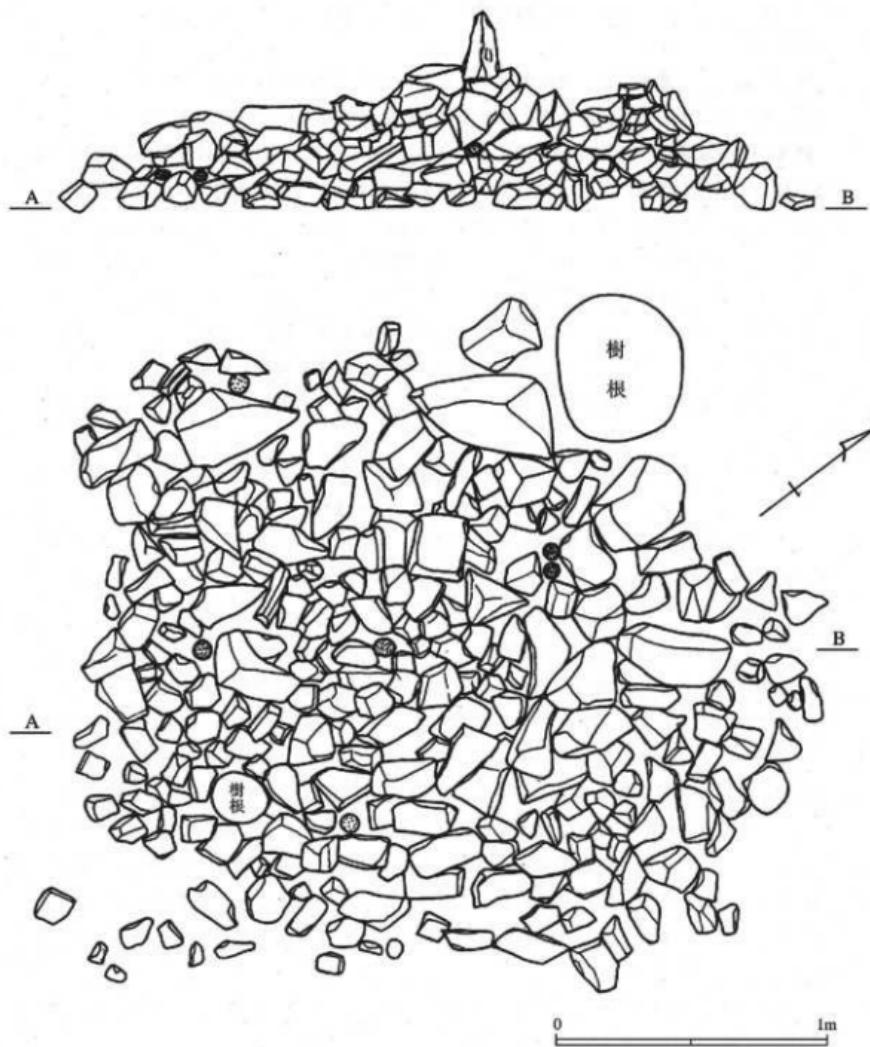
1) 遺構

山口県で発見されている経塚の多くは、土木工事等で偶然発見されたものが多く、南原寺経塚のように原形を留めたままの状態を発掘調査した例は極めて少ないと。

本経塚の遺構は、塚の中央部に経筒を埋納する石室を上下2段に構築しているところに特徴がある。上段からは陶製経筒（図版1-1）1口、また下段石室からは経筒の外筒が2口合計3口出土している。ただし、褐釉四耳壺（図版1-2）については、このような壺自体が経筒として使用されている例が多いことから経筒の可能性も考えられる。これらのことから、本経塚では、おそらく3回追納が行われたものと考えてまず大過ないであろう。すなわち複合経塚と断定できる。複合経塚は、全国的にも数少ない経塚である。複合経塚が、なぜ行われるようになったのか、この過程を考察する上で、本経塚は貴重な史料を提供できるものと考えた。しかし、初期石室の上に、新たに石室を設けて埋経が行われていること、盗掘により副納品類が非常に少ないと、また上段の石室を設けるため初期築造の



第2図 経塚主体部（初期石室）
復元想定図



第3図 経塚実測図

石室が攪乱されているため、経塚研究にとって十分な資料を提供できなかったことはとても残念である。

今回の調査は、盗掘以前の遺構の状態や初期の遺構がどのような状態であったかができるだけ明らかにするように努めた。以下遺構の状況について述べることとする。

経塚の立地場所は、南原寺經塚のように寺院の境内とか、宗教的施設や遺構の周縁に構築されている例が多い。また寺院は天台、真言系が多く、特に教義的には天台系との密接な関係がある。本經塚の場合は、現在のところ寺社にかかる遺跡とのつながりは考えられないが、立地場所は丘陵性山地の尾根の端に構築されている。この位置からは大嶺盆地を東に一望でき、また南原寺經塚の立地している桜山を南に望むことができる。立地条件として、展望のよくさく高處がえらばれているのが本遺跡の特色である。

山麓周辺は、古代から中世に至る遺跡が多く分布し、また現在の集落も立地している。このことは、本經塚の構築者、すなわち願主とのかかわりを考える上で大切な資料と思われる。

次に、外観から見た遺構、すなわち外表施設は、直径約3m、中部の高さ約60cm測る小丘状の石の塚といった感じの積石遺構である。盛り土ではなく人頭大の塊状の自然石を一面に覆い、その隙間には、小角礫がつめられていた。図版3-3に見られるように中央部の位置に幅約15cm、高さ30cmの自然石が一個墓標のように建てられていた。また、積石の周縁は、垣石をめぐらした状況ではなく、栗石を円形状に近い状態に配石されていた。裾の部分は、明瞭な縁石や地山整形痕は認められず、径10~30cmの角礫が、乱雑に置かれていた。南原寺經塚や中世墓の遺構は、基壇を設けたり、方形状に垣石を配置して封土を施し、さらに覆き石を敷き小丘状に築いているのが特徴であるが、前述の通りこれとは異なっていた。

本經塚は、封土が施されておらず自然石を塚状に積み上げているため遺構の表面には草木は生えていなかったが、遺構の縁側には、根まわり径50cmと径30cm余りの樹木が生えていた。中央部の積石部分は、3段ないし5段に構築されていたが、他の部分は1~2段となっていた。中央部の積石の高さは、地山から60cmあまりで、縁の部分は30cm程度であった。積石に使われている岩石は、石灰岩や花崗岩、頁岩、砂岩であるが、本遺跡の立地している山地は、赤土であり周囲には、岩石がないので他の地区から持ち込まれたものと考えられる。

内部構造の主体は、経筒を納める石室であるが、この施設は遺構の中央部に上下2段に設けられていた。下段の石室は第2図及び図版5-3に見られるように地山を約35cm掘込み、表面は粗雑ではあるが半加工した花崗岩の自然石が底石として埋められていた。底石は長四角状を呈し、長軸42cm、短軸36cm、中央部の厚さ12cmを測り、底部に入頭大の塊状の自然石を敷き、この上に置かれていた。地山から石室の底面の深さは約15cm、直径は34cm余りの円形状で、この周囲は石組みされていた。この石室部分が初期遺構の現状を留

めており、露出した側壁地山の一部に木炭片が付着していた。この初期構築の石室上部約25cmの位置に長軸42cm、短軸29cmを測る不整形な大理石の自然石が底石として下段石室の一部を覆うように置かれていた。この部分の石室を上段石室とし、当初の石室を改造したものと推定した。ただし、この石室は盗掘で原形を留めていなかった。

初期石室には、第4図-2の褐釉四耳壺と第4図-4の須恵質陶製の経筒外容器が底石の上に納められていた。この経筒外容器は図版5-2のごとく上段石室の底石を取り除いた痕に底部を含め大半の陶器片が検出された。検出された陶器底部の位置が現位置を保つものとみられ、この器の高さは口縁部を欠損していても約31cmであることから、これが破損して後に上段石室が設けられたものと推定できる。最初に埋納されたのがたぶんこの須恵質の陶製経筒外容器だと考えられる。口縁部は欠損しているが底部経8cm 脚上部の経15cm の胴長の壺が外筒として使用されたものと推定される。外筒専用の壺ではなく、日常雑器の伝世品が転用されたものと考えられる。褐釉四耳壺は原形を保った状態で出土していることから、初期の石室に追納されたものと断定できる。

やや不自然に感じることは、図版4-2のごとく最初に出土した陶製経筒が上段の石室の底石の上に納められておらずに、側石の壁にもたれた状態で出土している。これは盗掘の後、再びこの位置に置き替えられたのではないだろうか。上段石室の側壁石組みは、粗雑であり、簡略化され明確に側壁だと言える状況になかった。盗掘によって一部破壊されたものと推定した。

一般的に経塚を築造する場合は、土壌を掘り小さな石室を構築して底石を敷き、経筒の外容器なわち外筒を据え、これに經典を納入した経筒を納め、土壌や石室に木炭を詰め、さらに石室に蓋石を被せ、その上に栗石を積み上げて石の塚が築造されている。本遺構についても、初期の段階、すなわち第一期造営では、経塚主体部復元想定図（第2図）のごとくこの一般例に該当していたものと考えられる。

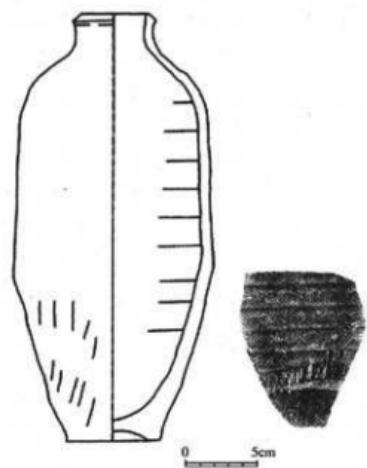
第二期石室の造営は、初期石室を一部改造して利用しているところに特色があるが、盗掘で破壊され原形を明らかにできなかった。

南原寺経塚の場合は、図版6-2に見られるように地山を円すい状に約83cm掘り込み深さ約110cm、幅約95cmの円形を呈した土壌を内部主体とし、この底部に底石を置き、また木炭をつめ滑石製経筒が納められていた。

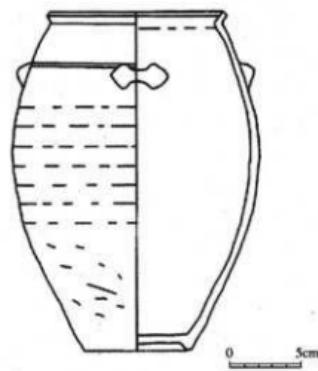
2) 遺物

遺物の出土が極めて少なく、積石部分から出土した遺物は、図版1-5のとおり、弥生式土器片、須恵器底部、土師器片、瓦器皿底部とサイダーやビールなどのビン類、古銭である。

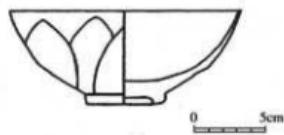
積石の中からは、砥石やすり石の下石、石器剥離片、古代の甕などに用いたと考えられる焼け跡の痕跡のある人頭大の塊石も検出されている。本遺跡周囲の山地は粘土質の赤土であるため、岩石類は他地区からの持ち込みと考えられる。遺構の岩石類については、遺



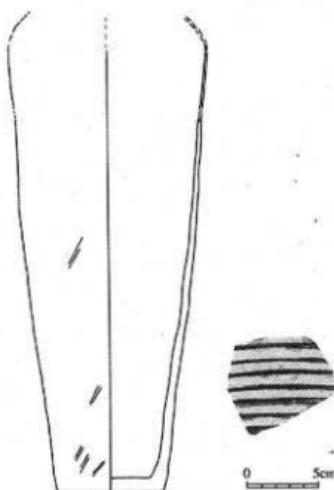
1 陶製縦縫外容器



2 褐釉四耳壺



3 青磁鑄蓮井文碗



4 須惠質縦縫外容器

第4図 出土遺物実測図

跡の立地している丘陵の北麓にある東分中村遺跡出土のものを持ち込んだ可能性が強い。また岩質は、花崗岩、チャート、頁岩、砂岩、石灰岩等種類が多く、石灰岩以外は大嶺盆地外から持ち込まれたものである。

一方、下段の初期石室から出土した遺物は、図版1-4の須恵質経筒外容器と図版1-2の褐釉四耳壺、図版1-3の青磁鑄蓮弁文碗各一口であった。四耳壺は、図版4-3のごとく胴部から上は、図版4-2の陶製経筒と一緒に石の間から露出していた。壺全体に土がつまっていたが、経巻はすでに形跡をとどめていなかった。

褐釉四耳壺（図版1-2）口経10.1cm、底径6.9cm、胴部最大径16.1cm、器高24.2cmを計り、器壁は比較的薄い作りで、内壁に1.1cm幅の巻き上げ成形痕が底部から頭部にかけて認められる。頭部は上腹部から直線的にすぼまり、上端で反転し、短い口縁がつづく。胴部と頭部との境に当たる部分に4個の横耳の把手を配している。また把手の上部には、ヘラで陰刻された1本の沈線と耳の下位には、1本の波状沈線が無造作に施され、一周完結していない。底部は低い高台となっており、胴部中央から底部にかけては緑灰色、これより上部と内面は褐色を呈し、内外面に釉が薄くかかり、外面は頭部から無造作に鉄釉を流していくが溶融不良である。

この壺は出土状況から考えると、初期石室に追納されたものと推定される。しかも山陽町の厚狭川流域の盆地を眼下に収める標高60メートルの丘陵頂上に立地している妙徳寺山経塚及び長光寺山経塚出土の四耳壺と形態が酷似している。長光寺山経塚の造営時期は平安時代末期を中心に、その前後と考えられている。また妙徳寺山経塚はこれよりも先行するが、時期差はあまりないものと考えられている。特に妙徳寺山経塚出土の四耳壺とは器の大きさ、焼成、色調共に酷似していることから、本経塚の造営時期は山陽町の両経塚と時期差はあまりないものと考えられる。すなわち初期造営は平安時代末期を中心にその後が想定される。

須恵質陶製の外容器（図版1-1）図版5-2に見られるように小さく碎け初期石室内に散乱した状態で出土した。しかし出土状況を考えると、この器こそが初期埋置されたものと推定される。すなわち底部のみは原位置にあったものと考えられ、その上部に第2期造営石室の底石が埋置されていた。この上下の空間は20cm余りであり、この空間では本外容器の復元器高が頭部、口縁を除いて31cmあることを考えると、とてもこれを埋置しておける状況ではなく、この時すでに破損していたものと考えられる。追納にあたっては先に埋納された経筒のことはあまり意識しなかったものと受けとめられる。

底部は平底で径7.6cm、頭部から口縁部は欠落しているが胴部の上部がややすばんでいく様子がうかがえるので胴長の壺であると想定される。器壁は胴上部で0.3cmあまりの比較的薄い作りで、内壁に0.7cm幅の巻き上げ成形痕が底部から明瞭に残っている。外面は刷毛で無造作に成形した痕があり、また底部に近い位置では右から左下に向けてヘラなでした

沈線が数本走っている。器質、色調は須恵器に酷似しており自然釉はかかっていない。

青磁鑄蓮弁文碗 糸底をもち底部径5.5cm、高さ6.7cm、口径16.6cmを測る。県内出土の青磁のなかでは焼きがとてもしっかりしており、口縁は広がりわずかに外反している。外面には二重の蓮弁文が刻され、高台を除く全に施釉されている。釉調は透明感の強い青緑色と言うよりはやや黄緑色を帯びており、底部に貫入が見られる。この青磁は中国からの輸入品であり、中国最大の青磁窯のある竜泉窯系の青磁と推定される。しかも竜泉窯後期の特徴を持った色調から元の時代に製作され日本に輸入された青磁鑄蓮弁文碗といえる。この碗は日宗、日元貿易が栄えた時期、すなわち鎌倉時代中期から末期にかけて大量に国内に輸入され、お酒やお茶を飲む器として、またご飯やおかずを盛る器として使用されていたものと考えられており、中世遺跡から多量に出土している。

のことから本経塚の終期は、鎌倉時代中期から末期が想定されるが、初期埋納から時差が開きすぎることを考慮し、中期頃を考えるのが妥当ではなかろうか。

陶製胴長壺（図版1-1）底部は上げ底で6.6cm、器高30.1cm、口径4.8cm、胴部最大絶14.5cmを計り、内面及び口縁から胴部上部にかけて薄い緑灰色の自然釉がかかり、焼きは良好である。内壁、表面ともに2.0cm幅の巻き上げ成形痕と胴部中央下から底部にかけてヘラで上下に押さえて成形した痕がある。出土状況は図版4-2に見られるように上段の石室から検出され器の破片の一部が蓋代わり用いられており、たぶん盗掘後に被せられたものと考える。口径の広さから考えると経筒として用いられたものと推定される。この場合は伝世品としての日常雑器胴長壺が、経筒として追納されたものと考えられる。これに類似するものは山口県内では出土例がないが、滋賀県の比叡横川経塚出土の経筒に形態が酷似している。この経塚は平安時代後期造営で、この経筒は中国からの輸入品で宗時代のものとされている。については追納されたと考えられるこの経筒をもって、本経塚の造営時期を平安時代後期と類似することは妥当ではない。というのは、伝世品の場合は時代が下って埋納されることが可能であり、追納の終期は、青磁碗をもって推定することが妥当と考えた。

その他の遺物（図版1-5）積石部分と地山部分から出土した遺物は、弥生式土器の壺類、部土器片、土師器片、須恵器長頸壺の底部、瓦器皿底部、砥石、すり石下石、古銭（寛永通宝）でこれらの遺物は副納品とは考えられず、経塚造営中に混入したものか、またはその後持込まれたものと推定される。

4 経塚に関する所見

1) 造営目的とその変遷

経塚は、経典を書写し供養した後、これを銅製や陶磁器などの容器に納め、地下に埋納して、未来永劫に保存しようとの意図のもとに営まれた仏教遺跡である。その発生は平安時代に流行した末法思想に影響されていると言われている。仏教では、釈尊の入滅後は正

法の世が500年（一説に1000年とも言う）、像法の世が千年を経た後には、その教法が廃れ、惡のはびこる末法の世となる。しかし長い末法の後に再び弥勒菩薩が第二の釈尊としてこの世に出現し、衆生を濟度するという一種の輪転思想である。

この末法思想もまた、歴史の見方としては、墮落史觀に属するといえる。ここでは正法時から像法時へ、さらに末法時への移行につれて人々は墮落し、全く暗黒の悪世となるという史觀である。わが国では、永承7年（1052）が末法の初年と信じられていた。とりわけ10世紀から11世紀半ばにかけての平安末期には、転変地変、火災、疫病、戦乱など、末法時接近もしくは末法時突入を実感させる状況が続き、このような社会的背景に基づき末法思想は高潮し、広汎な経塚造営の展開をみることとなった。

経塚造営の目的は末法対策であり、末法到来による仏典亡滅を怖れて、これを地中埋納し、弥勒出生を期すといった趣旨であった。このことは比叡山横川經塚によく表れている。現存する最も古い資料は、藤原道長が寛文4（1007）年8月に大和の金峯山の山頂に經典を経筒に納めたことを記した日記「御堂闇白記」と、これらの遺品が元禄4年（1691）に発掘されている。これによると末法対策というよりも、經典を書写し、供養し、これを埋納すること自体が極楽往生のための功德の一つに数えられていた。すなわち埋經が現世安穩、後世菩薩の業とも、死者への供養とも考えられるようになり、造営の目的に変遷がみられる。ここにみられるように末法思想と淨土思想が結びついて経塚造営が隆盛し、また一方これらの影響を受け諸塔婆の造立も盛行している。造営の中心は平安時代末から鎌倉時代であり、近世になると経筒に經典を納めて埋納する例は極めてまれとなっている。美祢市西厚保町本郷の西円寺に宝暦8年（1758）造営の経塚や宇部市の東隆寺に元禄年間に造営されている一字一石經塚、油谷町の山光寺に享保17年（1732）に造営された多字一石經塚のように、埋納經典は、小さな河原石などに經文を書写した礫石經に変化している。このように時代とともに造営の目的や構築法等に変遷をみることができる。

さらに、経塚は一般に小高い山の上とか、神社や寺院などの背後の丘の上とかの見晴らしの良い景勝の地が選ばれている。また、古くからの靈山、聖地とされているところにも多いが、南原寺經塚のように経塚群を成して營まれている例も多く認められる。また本經塚のように何年かにわたって順次追納されている例もある。これを複合經塚と呼び県内では山陽町の妙徳寺山經塚や時代は下るが小郡開作經塚にみることができる。これらは単独經塚と区別し、他の関係遺跡とのつながりを考慮して多方面から総合的に研究していく必要がある。

ここで、複合經塚である本經塚について考察してみたい。

經典を納めた経筒、またはその外筒容器が、一つの經塚から3口出土している。さらにこれを納めておく石室が上下二室設けられている。このような例は、県内では一例も報告されていない。初期石室は、地山を掘り下げ石組みを施した石室を設け、側壁に木炭の痕

跡が認められる。後に設けられた上段の石室は、初期石室の上部に底石を施しただけであり、側壁の石組みは乱れていた。盗掘で乱れたものか不明であるが、要は末法を意識して埋納された状況とは考えられなかった。また初期石室に追納されていた褐釉四耳壺と青磁鍋連弁文碗は、一緒に埋納されていることから、日常雑器として使用されていた青磁碗が、経筒の蓋に転用されたものと察せられる。この鍋連弁文碗は、鎌倉時代中頃から末期まで日本列島の各地で、お酒やお茶を飲む器として、ご飯やおかずを盛る器として、親しんで使われた碗であることが、全国各地の中世遺跡からの出土例で報告されている。山口県で「大内氏館跡」、むつみ村の「岡田・江良遺跡」、下松の「都町北遺跡」、防府市の「右田・一丁田遺跡」、美祢市の「本郷遺跡」など数多くの中世遺跡から出土している。この輸入青磁碗のことを考慮すると追納の終わる時期は、鎌倉時代中期以降から末期が想定される。また追納ということは、継続的に営まれていることを意味している。この継続性を考えられると、願主は同一人物か、またはその一族が想定される。しかも、造営の目的はおのずと極楽往生の意趣をもつ仏教的善根が強く支配していたものと考えられる。

これらのことから、複合經塚は板碑などの造立と同じく、単なる追善供養的性格を帯びたものとして機能し、いわば儀礼的なものに変わってきたのではないかと思われる。

図版1-4の須恵質の経筒外容器は、初期の造営時に埋納されたものと考えているが、これを明確にする資料が検出されていないこと、またこの外容器に類似する遺物が現在のところ県内外出土の古陶器に見あたらないので時代を明確にすることが出来ない。しかし、須恵器ともいえる須恵質の陶器であり、追納のことを考えれば、平安時代末期から鎌倉時代初期が想定される。また、図版1-1の経筒は、中国宗時代のもので平安時代末期経塚からの出土例（比叡横川經塚）があることから、日常品として使用されていたものが後になって経筒に利用されたと考えれば、製作年代と追納年代が隔たっていてもこのようなことはあり得るものと解される。たすなわち伝世品が使用されたものと考えられる。そこで、本經塚の造営は、図版1-1の経筒及び図版1-2の褐釉四耳壺の出土から、平安時代末期ないしは鎌倉時代初期が想定され、さらに追納が終わる時期は輸入青磁碗が13世紀後半と考えられることから、鎌倉時代末期頃を想定するのが妥当ではなかろうか。

次に、誰が願主となって造営したかということになるが、南原寺經塚のように寺院の境内近くにあれば、これとのかかわりが深いことが考えられる。本經塚の場合は、神社や寺院とのかかわりは現時点では考えられない。この地に館があったと推定されている吉則城主の吉則兵庫頭や大嶺の地頭由利氏のことがむしろ想定される。しかし現時点ではこれらにつながる資料は見あたらない。なお、本經塚に隣接している二ツ堂地区に「永正7年庚午9月吉日 大妙典一千部供養」と刻された石碑があったことが、寺社由来に記されている。近年まで經塚は現存していたが、道路拡張工事で撤去されている。また、下領八幡宮の西方山麓にある尾其上（下領住宅のある地区）の西背後に標高151.5m余りの山があるが、こ

の山を松本納経塚と称している。遺構の確認は、まだなされていないが、経塚山といった名称や周辺に土居の前といった地名があり、また古代から中世にかけての遺跡が下領台地に分布している。今後、これらについて調査研究することによって東分中村経塚の詳細を明らかにしていきたい。

2) 美祢市の経塚

山口県内の経塚については、弘津史文が1929年に著した「防長和鏡の研究、防長の経塚」（経塚遺跡53カ所）が最初の論文である。昭和52年長光寺山経塚報告書の山口県経塚一覧表では93カ所、その後、南原寺経塚、東分中村経塚など発掘調査で新たに確認されたものを加えると約100カ所ばかりある。さらに、松本経納山のような参考地名を加えるともっと多くなるものと考える。なかでも有銘経筒の出土例として2例報告されている。日置町の寛治7年（1093）の利生山経塚、萩市の康和3年（1101）の光明寺経塚があり、これら経筒には、共に「鎗師雀部重吉」と刻まれ、制作者が同一人物であることが判明している。また防府市の保延6年（1140）の日輪寺経塚では、紙本墨書き華経八巻と共に願文を納めた経筒が出土している。この願文には、連如房巖勝がその母や三子の息災延命、後生善処のため書写供養した旨が記されている。阿武町の御山神社境内に立地する「御山神社経塚」出土遺物（副納品）は、重要な史料ということで山口県の指定文化財となっている。経筒には在銘がなく造営年代は不明であるが、経塚の形状、経筒の構造、精白磁合子の埋納から12世紀代の造営にかかるものと推定されている。

出土した経筒の中からは、埋経者の篤信にもかかわらず、経巻は朽損して形をとどめていないのが普通一般の例である。上記のような経塚出土遺物は、歴史史料として価値が高く、ましてや美祢市のように、古代、中世史料のきわめて少ない地においては、極めて貴重な史料である。

ところで、美祢市内では、南原寺経塚と本経塚の2基が発掘調査されているが、これ以外にも数基確認されている。今は消失しているが、すでに本書で述べている二ツ堂経塚は、経碑に刻されていた年代が永正7年（1510）である。この時期は、山口が小京都といわれ大内館が栄えていた頃であり、この地では、おそらくまだ杉氏が大嶺の領主として館を構えていたものと考えられる。ここで注目されることは、大嶺地区でこの時期、すなわち永正13年（1516）から天文10年（1514）の26年間に、経塚と同じように仏教遺跡である板碑が6基が造立されている。板碑は、中世において盛んに造立されていた石造の卒塔婆の一種である。その目的は死者の冥福を祈る追善の供養、生前に自己の死後の冥福を祈る逆修供養等のために造立されている。経塚造営も時代が下がると趣旨は多様化し、追善や逆修など供養のために行われているものが主流となっている。中世になるとこのように大嶺盆地に、経塚の造営や板碑の造立が盛んになっているが、このことはこの地に阿弥陀浄土を求める

仏思想が広まってきたことを物語っているようだ。

上記の各板碑は、造立年代、願主が刻銘され、造立された時代背景を知る貴重な史料である。大嶺町藤ヶ河内の5基は、徳裕という人物が本願、逆修としてかかわっている。また東分中村經塚の近くに造立されている日永の板碑は、高さ144cm、中央部の広いところの幅65cm、厚さ12cmの自然石を用い「永正13天、丙子2月18日、儀法講結衆等白」と刻銘されている。この板碑は、信仰を同じくする人々が結衆として作善供養したことがうかがえる。造立の経済的負担と中央文化の受容能力を考えると、造立者の多くは在地豪族と想定されるが、このように結衆が造立にかかわるようになると、浄土信仰が庶民にも広がったことが察せられる。

時代が江戸時代になると、美祢市西厚保町本郷の西円寺境内墓地の一画に立地している西円寺經塚（図版8）のように一つの石ころに一字づつ經典を書写した一字一石經が埋納された經塚（礫石經ともいう）が造立されている。基壇の上に建つ卒塔婆の經碑には、正面「奉納三部經一字懇等權」、右側面「干時宝曆8年2月15日成」、左側面「法皇山西圓寺七世等外建 寄進主嘉万邑村上六左衛門」と刻され、淨土三部經が埋納されていることが知られる。

さらに江戸時代末期になると、美祢市伊佐町の万倉地に造立されている四國納經塚（図版9）が出現してくる。この万倉經塚は、平地水田の脇に一辺2.6m×5.7mの直角三角形状の小丘石積の上部に庚申塚と一緒に建立されている。基壇の上に自然石の大理石を正面と両側面を加工し高さ98cm、幅31~38cm、厚さ22cmの經碑が造立され、正面「天保五年 四國納經塚 善四良子 米藏」と刻されている。これは回国納經塚であり、まさに經塚の終末期に出現した經塚といえる。民間信仰と結びついで一般庶民が、造立にかかわっている点に注目したい。また伊佐町牛明の高下觀音堂經塚（図版7）は、地元にあった2基の經碑がこの堂内に移築されたものである。一基は、高さ150cm、幅約45cmの自然石に「明和七庚寅三月 法華經書写石塚 世木政盛書之」、他の一基は、花崗岩の自然石の表面を加工し、高さ約102cm、幅約46cm、厚さ29cm余りで「文政九丙戌五月 法華經書塚 丑明 岩崎源蔵写」と刻されている。

この他、美祢市周辺には經塚遺構については、未確認であるが、經塚遺跡に関する伝承や地名が残っているものは数多くある。その事例として、美祢市及びその周辺では、大嶺町の松本納經山、秋芳町の秋吉經塚山、別府共栄のヒメヅカ、共栄經塚、共栄の塚、楠町東吉部荒滝の經塚、飯山の中山備前守の墓（別名一字一石塚）、西万倉小河内の經塚などが知られている。

5まとめ

本經塚は、經筒を埋納する石室が上下2段設置され、この構築状況や出土遺物から複合經塚と考えられる。盗掘されているので出土遺物は非常に少なかったが、本經塚の特徴は次のとおりである。

1 本經塚は、大嶺盆地が一望できる丘陵性山地の尾根の先端に構築されているが、現段階では、高所に営まれた背景は詳らかでない。ただし山麓には、二ッ堂經塚が造営されており、また大嶺盆地に京都石清水八幡宮の莊園があったこと、さらにこの地には、古代や中世の遺跡（大嶺の地頭由利、大内の重臣杉の館など）が数多くあり、これらの遺跡とのかかわりについて検討していく必要がある。

2 外表施設は、大小の自然石の塊石を小丘状に石積みした積石遺構である。盛り土、基壇、垣石は認められなかった。使用された自然石は石炭岩、砂岩、礫岩、花崗岩、頁岩、チャート、凝灰岩等であり、この中には砥石、すり石の下石、焼痕ある岩石類が混入していることから山麓の東分中村遺跡出土の岩石が搬入されたものと想定される。

3 内部主体の石室は、上下2室設けられていた。下段が初期造営の石室であり、地山を掘込み扁辺な自然石を底石に置き、周囲は石組みされていた。上段石室は、底石が置かれていたが石組みは乱れ簡略化の傾向を思わせた。

4 出土した遺物は、陶製經筒、須恵質の陶製經筒の外容器、褐釉四耳壺、青磁鑄連弁文腕各一口である。褐釉四耳壺と青磁鑄連弁文腕は、初期石室から出土していた。

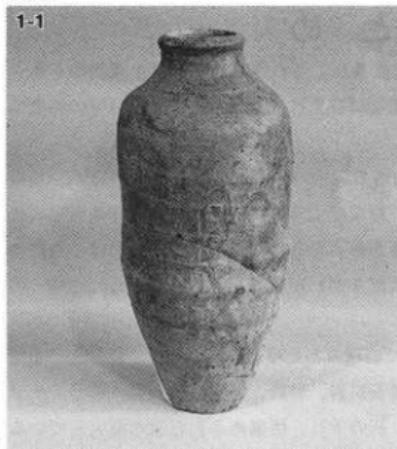
四耳壺は、本經塚と同じ厚狭川流域にある山陽町の長光寺山經塚、妙徳寺三經塚から出土しており、これらの遺物と形態が酷似している。特に妙徳寺三經塚の四耳壺とは、口径、底径、器高の長さ、色調共に類似し、中でも鉄釉が胴下半に流条下している様子や沈線の施しが酷似しているので同一窯で製作された可能性が強い。この四耳壺は、鎌倉時代初期を大きく下らない国産品で、猿投窓を初め東海地方の移入品と考えられる。青磁腕は、市内の本郷遺跡をはじめ県内の中世遺跡から出土している。図版1-1の陶製經筒は、県内出土の古陶器に類似がないが、平安後期に造営された比叡横川經塚出土の經筒に形態が酷似している。この經筒は中国宗時代の輸入品とされている。

5 造営時期は、出土遺物を総合して考えれば、最初の造営は平安時代末期を中心にその前後が想定され、追納の終わりは鎌倉時代中期ないしは末期が考えられる。

ともあれ、本經塚は、今後の複合經塚研究にとって、また淨土思想の地方への広がりを究明する貴重な資料的価値があるものと考える。なお、本經塚の造営者は、輸入品入手し、經塚を造営する経済力と写經供養の功德を受容する教養をもった人物が浮かび上がるがいざれにしても推測の域を脱しないが、今後の研究が期待されるところである。

図版1

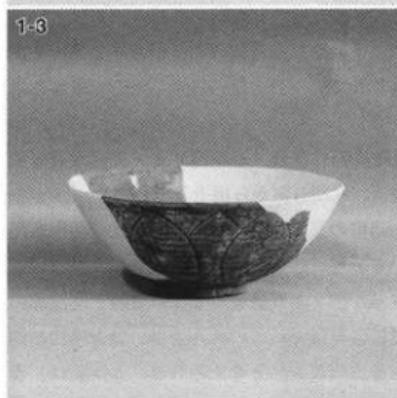
1-1



1-2



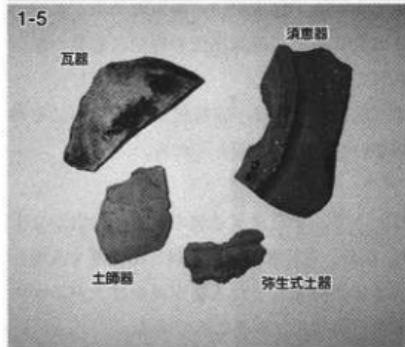
1-3



1-4



1-5



図版1 経塚出土遺物

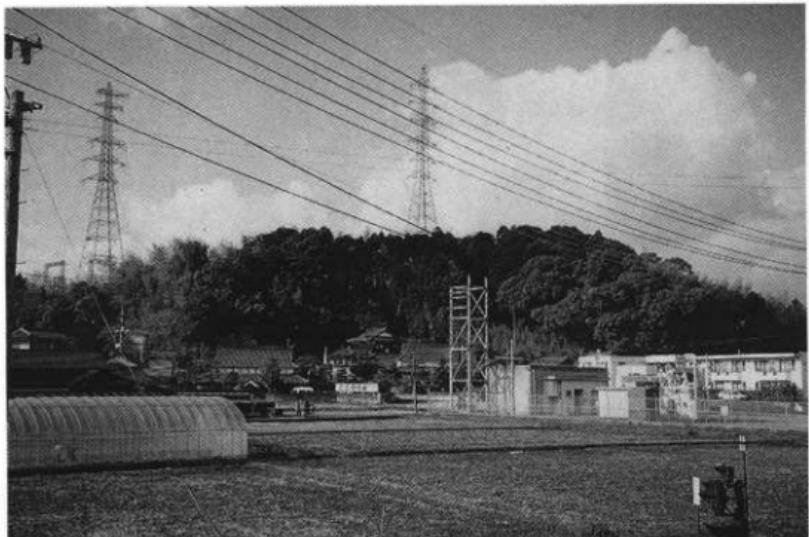
図版1-1 陶製の経筒

図版1-2 桶軸四耳壺

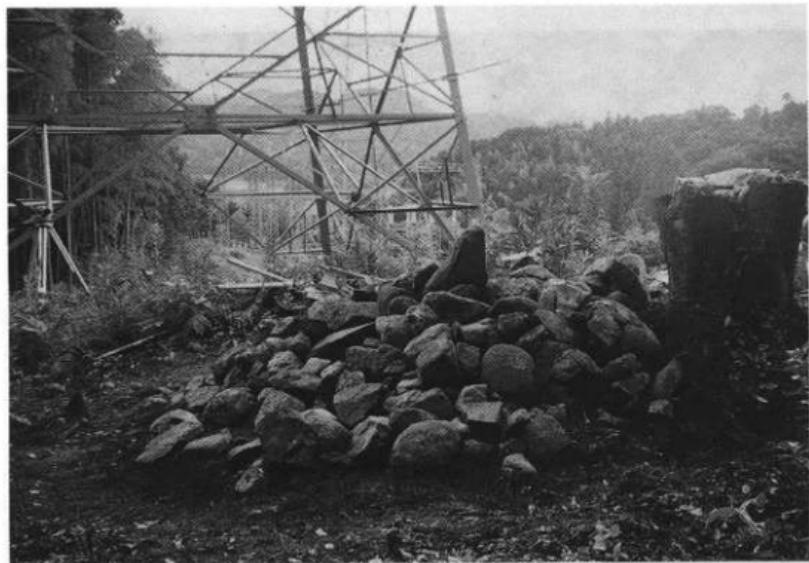
図版1-3 青磁鑄蓮弁文碗

図版1-4 須恵質経筒外容器

図版1-5 経塚石室及び積石部出土遺物



図版2 東分中村経塚遠景



図版3-1 経塚積石の状況（北東から）



図版3-2 経塚積石遺構の状況（南東から）



図版3-3 経塚積石遺構中央部



図版4-1 遺物出土状況 1



図版4-2 遺物出土状況 2



図版4-3 褐釉四耳壺出土状況



図版5-1 経塚の石室（上段石室底石と下段石室壁の木炭片）



図版5-2 経塚の石室（下段石室遺物出土状況）



図版5-3 経塚の石室（下段石室）



図版6-1 南原寺経塚の遠景と市街地



図版6-2 南原寺経塚の滑石製経筒出土状況



圖版7-1 高下觀音堂經塚（法華經書塚）



圖版7-2 高下觀音堂經塚（法華經書寫石塚）



圖版8 西円寺經塚（三部經石一字塔）



圖版9 万倉地經塚經塔（四國納經塚）